

## ハイデガー・フォーラム第17回大会

### 応募要旨3

(統一テーマ：自然と技術への問いII)

## 存在要求の要求とそれへの応答——ハイデガー技術論の理解のために

以下、本発表の目的を述べる前に、タイトルに掲げた「存在要求の要求」なる造語の意味を説明したい。

人はしばしば、それが現実だと信じたくない状況に直面する。たとえば受験番号が見当たらず、掲示板を見直すのをやめることができない受験生。自説を裏づける証拠が得られず、その捏造を画策する科学者、等々——。このようなとき、私は、自分の願いとそれをはねつける現実との間で、後者を認めることができない。私はどのみち現実を受け入れねばならないのだが、願望の実現を諦めることができないのである。

ここで、次のように問うてみよう。そもそもなぜ、私はここで現実を受け入れねばならないのだろうか。

空想の世界では、私の願望は、それを願うやいなやその世界で「実現」する。この世界では、願望とその実現の間にギャップがない。であれば、私は、この空想の世界に耽ってればよいのではないだろうか。それとも、私は空想では満足できず、実際の体験を求めているのだろうか。それならば、たとえば望む体験を好きなだけ味わわせてくれる「経験機械」(R・ノージック)があればどうだろうか。

人によっては、この機械を利用したいと思うかもしれない。しかし、少なくとも上の状況に置かれるとき、私は自分の願望が現実となることをこそ望んでいる。いいかえれば、私は自分の望むものが存在することをこそ求めているのであり、それをたんに体験したいというわけではないのである。

それでは、なぜ私は、たんなる体験ではなく存在を求めるのだろうか。

まず、私はここで、自分の望むもの——「受験番号」「証拠」等々——が、何も無いところに出し抜けに存在し始めることを求めているわけではない。そうではなく、私はこれらのものがそれ自身の側ですでに存在していてほしい、既存物化していてほしいと願っている(にもかかわらずそうならない)のである。

ところでハイデガーは、このように自ずから既存物化するもの(モノ)のことを総称して「自然」や「全体としての存在者」と呼んでいる(e.g., GA9, 189-190)。また、彼のいう「存在」とは、何よりもまず全体としての存在者を既存物化させるもの(モノ)のことであると理解できる。とすると、次のように

いえるだろう。

まず、上述した私の存在要求=既存物化の要求に応ずるのは存在である。存在が、私の求めるものを——それを既存物化させておくことによって——私に提供するのである。とすると、私をしてこの存在要求をさせるのも、同じ存在である、といえると思われる。いわば商店の店主が客を店内に呼び込むように、存在が私を全体としての存在者の只中に呼び込むのである。それはいわば「自分の望むものの存在(=既存物化)を、全体としての存在者の只中に要求してこい！」という存在要求の要求である。だとすると私の要求は、本来、この存在要求の要求への応答だということになる。

さて、本発表の目的は、この「存在要求の要求とそれへの応答」という視座に立つことによって可能となるハイデガー技術論の解釈を詳述することにある。

まず、ハイデガーが存在と人間の間にある種の要求と被要求の関係を見ていたことは、ある程度テキストに基づいていえることである。本発表では、この関係を上のように捉えることにより、次のような利点をもつハイデガー技術論の解釈を提示したい。

第一に、この解釈では、いわゆる「総かり立て体制 (Ge-stell)」の原動力が人間にではなく存在にある、というおそらく衆目の一致する論点が、理解しやすくなる。万物を徴用し、かり立て、各種必要物の「在庫」としようとするこの体制は、存在から人間への存在要求の要求によって駆動されているのである。

第二に、それだけでなく、全体としての存在者が——「在庫」としてではなく——いわゆる「四方界」として近づけられることもある、というもう一つの重要論点にも、整合的な解釈を与えることができる。応募者の見るところ、このこともまた存在要求の要求への一つの応答の仕方として理解できるのだが、そのさい考慮に入れるべきは、四方界の一角を占めるとされる「神的なもの」の役割である。各種神話の時代にそうであったように、人は神々のもとでこそ、全体としての存在者があくまで一つの調和した全体(=四方界)として「存在」することを、迷わず「要求」することができるのである。

本発表では以上のような解釈に基づき、ハイデガーのいう技術にまつわる「危機」とは、ブレーメン講演で述べられているように、存在が招く存在それ自身にとっての「危機」であり、何人かの論者の試みている技術改革論は、ハイデガーの意に沿うものではないと論じる。むしろハイデガー技術論を真剣に受け止めるなら、まずなされるべきは、存在要求の要求への人間の応答の帰結として、現状を理解することなのである。